随想やましろ

いのちのお下がり

門阪庄三

「お下がり」という言葉も使わなくなりました。物を大切に使うべきだという考えが時代とともに薄らいで、兄姉の使い古しを弟妹が譲りうけることが減ったということでしょう。男3人兄弟の末でしたから、多くのお下がりのお世話になりました。野球のグローブを欲しいと言えば兄のお古をあてがわれたものでした。

仏さんの「お下がり」もありました。母は仏さんのお供え物の饅頭などを平紙に包んでは「仏さんのお下がりや。おあがり」とおやつに出してくれたものです。当時のお下がりは子供には特別でした。それは普段には口に入らない高価な和菓子であったためかもしれませんが、それだけではなかったように思います。

生家の仏壇は父母の寝所、今思えば家の一番の場所にあったように思います。年に数回仏壇を人が囲む季節がやってきます。子供にもお坊さんを迎える両親の様子から仏事の大変さがわかるようになっていました。その大切さは亡き人々への想いからきていることも感じていました。その想いを具体的な形にして設けたものが仏壇であったと思います。

たまたま両親がいない時に、怖いもの見たさから仏壇の奥深く覗いて位牌に手を触れたことがあります。人が亡くなることの意味をいささかもわからぬ子供には仏壇は怖い空間であったけれど、亡くなった人々との結びつきの場所でもありました。

お下がりのお饅頭を子供に「仏さんのお下がり」と手渡す時の母の顔が今でも思い出されます。しかし、今となっては私に託したかったかもしれない母の気持ちを確かめることはできません。昔に戻ってもう一度お下がりをもらう機会があればと思います。

（かどさか内科クリニック）

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます